

📖 「地図なき山」 日高山脈 49 日漂泊行 (角幡唯介 著)

著者は探検家で作家。「空白の五マイル チベット・世界最大のツアンポー渓谷に挑む」や「極夜行」などの極地単独探検を実践している。自分の頭で考えずに済むシステムの外側に出て、自分の人生を生きる「脱システム」を掲げる冒険家だ。

この本は「地図をもたずに登山をしたら、山がどんなふうに見えるのを知りたいんだよ」と「脱システム」に身を置き、無秩序なカオスの中で何か答えの無いようなものを見つける日高山脈の試行錯誤の記録である。

2017年夏「旅立ちの記」「裸の山に震え慄く」。2020年夏「新しい道を見つける」。2021年夏「巨大な山に登る」。2022年夏「ラストピークをめざす」。

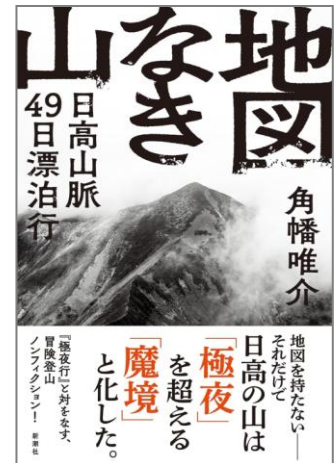
と4年の長きにわたり日高山脈に入り込む。41歳から46歳の6年間の漂泊の記録だ。

特に2021年の南エリアの春別ダムから入りシュンベツ川水系の外に出る旅の記録は面白い。山口将太という若いシーカヤッカーを誘い、共に未知の水系を目ざす。釣った魚で大量の燻製を作り糧にする。沢を登り、魚を釣り、燻製にする。その繰り返しをしながら北に向かう。そしてでっかい山を見つけ登る。山頂に着くとポロシリ岳 2052mと山名が記されていた。地図を持たないので、目前に見えるでっかい山というイメージしかないが登頂するとポロシリ岳だったというのが新鮮だ。さらに北に移動し、トッタベツ岳 1959mを越えトッタベツ川を下り日高の東側に下り、約2週間の旅が終了する。

地図に頼らず目の前に現れる地標を頼りにしながらの移動にこだわることで著者は風景や土地に勝手に名前を付け、深い調和感を持つようになる。

北極探検で「風紋や自然物のおかげで先に行けるという感覚が常にあるとこと、旅という行為が土地と繋がること。それが生きているという濃密な実感を生み出すのだ」 今回の日高山脈での行動の間に2年間のブランクがある。しかしこの地図のない旅が北極探検に繋がっていることがよく分かる。

「自分で判断もせず、行動もしない。そんなの何が面白いんだって思います。僕は人生をつまらなくしたくない」。同感です。



(FY)

2024年11月20日発行 「地図なき山」日高山脈49日漂泊行
角幡多唯介 新潮社 1800円